

# 被災地と歩む若い僧侶たち

## 東北教区災害ボランティアセンターで働く常駐コーディネーター

東日本大震災発生直後の3月17日から仙台別院（仙台市青葉区支倉町1-27）に設置された東北教区災害ボランティアセンター。同施設には、宗門内外を問わず全国から多数のボランティアが訪れ、復興支援の重要な活動拠点となっている。ボランティア活動は多岐にわたるため、被災地の要望は何かを収集し、正確な情報と的確な指示・伝達をボランティアに届け、滞在中のボランティアのケアも行うのが同センターに常駐するコーディネータースタッフ。センターの活動を支え、時にはボランティアを励まし、被災地支援に関わってきたスタッフ2人に話を聞いた。

——スタッフになったきっかけは

廣川 昨年の4月4日にボランティアでこのセンターにお世話になった。被災地を初めて見て、何も無い海岸線にぼうぜんとし、少し内陸に入ると町は普通で、津波のすごさにただ驚いた。宮城県南三陸町の避難所に物資を届けたり、石巻市の称法寺（細川雅美住職）の流入物撤去の作業など4日間ほど滞在した。仕事を辞めたばかりだったので、4月下旬にも2週間ほどボランティアに訪れた。その時、スタッフにならな

いかと誘われた。流される情報と、現地の声が全然違うことを実感していたので、それを誰かに伝えたいから「時間がある限り手伝おう、今、自分ができることを」と思った。重枝 私は、震災から半年後の9月中旬に中央仏教学院時代の友達と3人で訪れたのが最初。その時、ボランティアとしてお茶会に参加したが、入居者の方と何もお話できず、「もっとできることがあったはず」という後悔が残った。だから一カ月後にまたボランティアに来た。このセンター



廣川 恵雄さん(31)  
奈良県宇陀市・安養寺衆徒

### 「時間の限り、今、自分にできることを」

の方と親しくなりスタッフに誘われた。「私はここに来べきなんだ」と心に強いものを感じて、スタッフになることを決めた。両親を説得するのはちょっと大変だった。

——コーディネーターとして感じたことは

廣川 被災地の要望はほとんど変わっている。例えば、流入物の撤去などハード面の支援は落ち着いたように伝えられているが、昨年末に宮城県のいくつかの地域で居住可能区域が定められ、それまで作業ができなかった場所に入れるようになった。力仕事が多くなった。ボランティアにもスタッフにも、いかに視野を広く持ち、状況を正しく判断するか、それに対する反応、対応の早さが大切。また当然、地域や一人一人、被災の状況は違うので、偏った見方や意見に左右されないように心掛けています。

重枝 各地から来られるボランティアは、個人の思いだけでではなく、地元の方の支援や現地に来られない人の思いを背負っている方もおられる。現に私も山口の人たちの思いを背負っているように感じる時もある。そういう背景まで感じ取るように心配りをしながら、皆さんの熱い思いを尊重した対応を心掛けています。せっかくだから気持ちよく活動してもらいたい。

——被災地の方との印象的な交流は

重枝 最近ようやくお茶会でもいろいろ話ができるようになった。先月は私の誕生日に仮設住宅のおじいちゃんから「おめでとう」ってメールをもらった。ちょっとしたことだけど、つながりができたようで、すごくうれしかった。

廣川 津波に遭った女川町で60世帯中、1世帯2人しか残っていない地区を訪れたことがある。その地域が特別ではないが、そのお宅との出会いは衝撃的だった。これからも、定期的なその方たちの顔を見に行きたいと思っている。

重枝 誓子さん(30)  
山口県防府市・明照寺衆徒



たいと思っている。

——震災1年だが

重枝 被災地の状況は刻々と変化している。最近被災者の方が積極的にお茶会の運営に関わったり、自発的な声を聞く機会が増えたように思う。一方で、「家にいると泣いちゃうからお茶会に出てくるんだ」とおっしゃるご年配や、震災の話題だけでなく、震災以前から抱える体調や家庭の悩みを明かす方もあって、先行きの見えない避難生活に不安が増している方も多い。そんな方かけられる言葉は多くないが、泣く時は一緒に泣きたい。「一緒に居るんだ」と感じられる安心感を大切にしたい。

廣川 例えば、支援物資がカップ麺よりサラダ油の方が喜ばれるように、非日常から日常へと少しずつ変化している。仮設住宅を例に見れば、被災者の方で少し元気な方が周りの人をリードするような、ボランティアの手助けを必要としないコミュニケーションの再生、復興が理想だが、なかなか前進できない人、追いつけない人はいる。そこを居室訪問などでカバーしてあげれば、支援の方法については、いつも疑問を抱えながらだが、「まだまだ、見えています」という無言のサインが伝わるように、継続的な支援を続けていきたい。

### 「一緒に泣きたい。一緒にという安心感を」